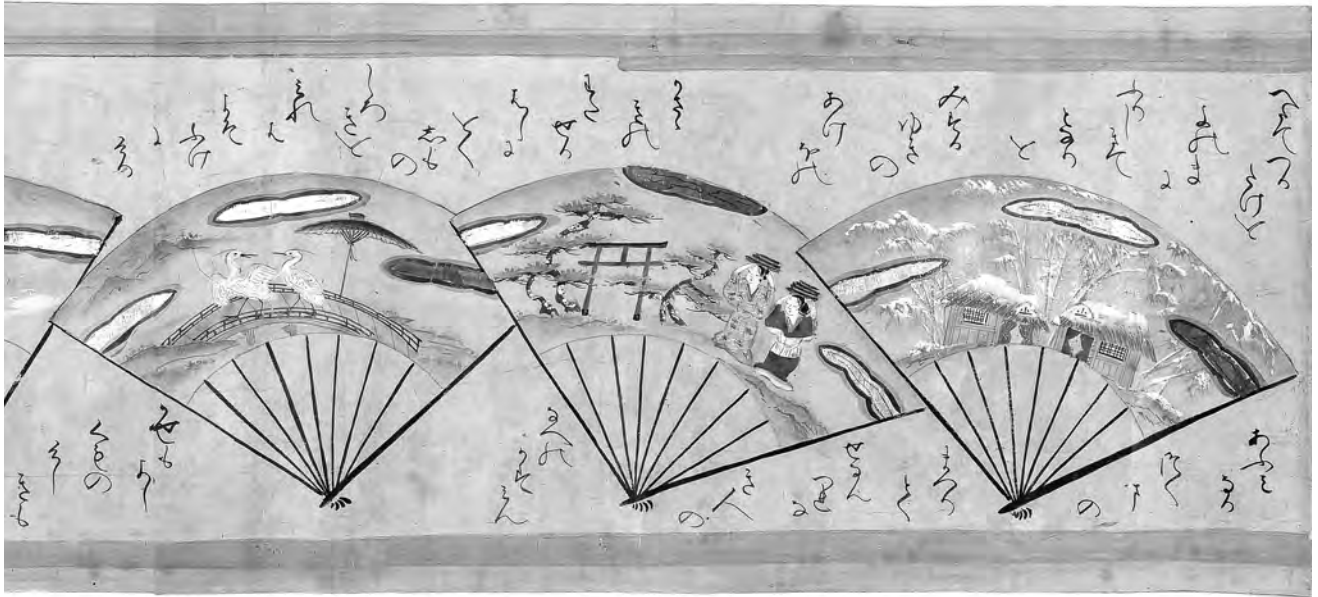


室町の“あそび”—「扇の草子」への招待



『阿不幾集』(貴重書99-73) 一軸 「かささぎ」の橋と鍋を被る女

室町後期から江戸前期にかけて盛んに制作された絵巻や絵本のなかに、「扇の草子」と呼ばれる作品群があります。扇形の枠内に歌にちなむ絵を描き、その周囲に歌そのものを散らし書きした形式の作品群を総称したものです。そこには、勅撰集や『伊勢物語』、『源氏物語』などに詠まれた著名な古歌をはじめ、謡曲や狂言、お伽草子に見える同時代の伝承歌などが収められています。現在五〇点以上の伝本が確認され、当館では絵巻や屏風、画帖や版本など、さまざまな形態の「扇の草子」を六六所蔵しています。

今回紹介する『阿不幾集(扇集)』は、縦一八センチと通常の絵巻の半分ほどの大きさの「小絵」と呼ばれる絵巻です。金銀泥を豊富に使用した豪華絵巻で、十六世紀末頃に書写された「扇の草子」の一伝本です。傾きを持たせた扇のなかに背景の景物まで細やかに描き込み、物語絵の趣を感じさせる一方で、なにやら謎めいた絵も見受けられます。たとえば画面左の扇絵には、橋から突き出たような大傘と二羽の鷺が描かれています。扇の上には、百人一首で有名な「かささぎのわたせるはしにをくしものしろきをみればよぞふけにける」(大伴家持)の和歌が見え、「傘」と「鷺」で歌中の「鵲」を当てる「判じ絵」だとわかります。歌が書かれているのですぐに理解できますが、もし歌が見えなければいかがでしょうか。もともと「扇の草子」は、実際の扇に描かれた絵を見せて、画題となった和歌を当てる「あそび」から生まれたものでしょう。

次に、画面中央の絵を見ると、鍋をいくつも頭に載せ鳥居に向かう二人の女性が描かれ、扇の下には「あふみなるつくまのまつりとくせなんつれなき人のなべのかずみん」とあります。これは『伊勢物語』百二十段に見える「筑摩の祭」を詠んだ和歌です。滋賀県米原市の筑摩神社では、毎年五月八日に八歳の少女が紙製の鍋を被り神輿に従う鍋冠祭が行われていますが、かつては旧暦の四月一日、女性が共寝した男性の数だけ鍋を頭に被るか、神前に奉納するという特異な祭りでも、数を偽れば神罰が下ると信じられていました。『伊勢物語』に筑摩の祭で自分に冷淡な女の鍋の数を見たいとあり、平安時代にはすでに行われていたようです。室町時代になると、同社の縁起が制作され、お伽草子でも鍋被りの様子を語る作品があり、他の「扇の草子」にも描かれることから、当時の関心の高さうかがえます。ただ面白いことに、先行する伊勢物語絵にはこの場面はほとんど描かれていないのです。伊勢絵では描こうとしなかった室町の風俗を描き込んだ点に「扇の草子」の特色があらわれています。

なお現在、当館展示室にて開催中の通常展示「和書のさまざま」では、当館蔵の「扇の草子」の画帖を出展しています。さらに四月十四日からは展示室内の特設コーナーにて、『伊勢物語』のコレクションで知られる「鉄心斎文庫」の小展示も行います。さまざまな形態で今に残る、魅力あふれる和書の世界を覗いてみませんか。

* 参考文献 安原眞琴『扇の草子の研究—遊びの芸術—』(ベリかん社、二〇〇三年)

(恋田知子)